様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　７ 月　４ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０４７７８

研究課題名（和文）アンデス文明形成期における神殿社会の成立・展開と地域間交流

研究課題名（英文）Social dynamics and interregional exchange in the Formative Andes

研究代表者
山本　睦（YAMAMOTO, ATSUSHI）

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：５０６４８６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　20,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、アンデス形成期（前3000年－紀元前後）における神殿社会の成立・展開と地域間交流との動態的相互関係を明らかにするため、ペルー最北部ワンカバンバ川流域の神殿遺跡に加え、社会の複雑化の軌跡は異なるが交流は想定されるエクアドル南部で発掘調査を実施した。また、よりマクロなレベルでの比較研究のため、環境的・文化的にも異なるペルー南部ナスカ市近郊で踏査をおこなった。
　この結果、ペルー北部とエクアドル南部における地域間交流の実態が明らかとなり、比較研究によって地域間交流の多様性が示されることで、社会変化における神殿の役割や神殿と地域間交流との関係について、より実証的に論じることが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果における最たる学術的意義は、神殿社会と地域間交流との相互関係を実証的に解明する手がかりを、ミクロからマクロまでの様々なレベルでえたことにある。研究が遅れているペルー最北部とエクアドル南部のデータを充実させた意義も極めて大きい。
　また、調査の際には、現地の人々への説明会や情報提供にとどまらず、教育機関と連動し、歴史教育の一環として発掘調査を用いることにとりくむなど、その社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the dynamism of the diachronic process of the early complex society integrated by the ceremonial center and its relationship with interregional interactions during the Formative Period (3000 B.C. - 1 B.C.) in the Andes.
And thus, we carried out excavations at two archaeological sites in the Huancabamba valley in the Northern Peru and at three sites in southern Ecuador since, despite the difference in the trajectory of social complexity, intensive interactions were assumed. In addition, for the comparative study in a macro level, a survey was carried out in the Nasca region in Southern Peru, where environmental and cultural contexts are quite distinct.
As a result, this study revealed the diversity and variations of interregional interactions in Northern Peru and Southern Ecuador. The data set obtained in this study made it possible to discuss the role of ceremonial center in sociopolitical transformation in relation to interregional interaction.

研究分野：文化人類学、アンデス考古学

キーワード：文化人類学　先史学　アンデス　社会変化　神殿社会　地域間交流　比較研究　形成期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

形成期（前 3000 年－紀元前後）は、アンデス文明の基盤が築かれたとされる時期で、その最大の特徴は、公共的・記念碑的・宗教的建造物である神殿を中心に社会的統合がなされた点にある。また、形成期では、神殿における諸活動を継続的に実施し、集団内での社会的差異を認識させる契機や手段となることから、社会変化に際して地域間交流のはたした役割が重要視される。

こうした状況の中で、近年における地域間交流に関する研究は、考古データの類似性や差異のみにとどまらず、地域間ルートの存在を考慮したうえで、形成期社会の展開との関係を論じるようになってきた。しかし、神殿を中心とした社会の成員の活動や戦略を切り口に、実際に移動または移動を統御した人々の実践として地域間交流を総合的に論じる研究は、ほとんどなかった。そのため、神殿を中心とした社会の成立・展開と地域間交流との関係性を、地域間ルートの成立から衰退にいたる過程およびその維持や管理までを含めて多角的かつ通時的に解明し、形成期の社会動態に実証的にアプローチすることが必要とされた。

それをふまえて実施したのが、形成期におけるペルー北部の地域間交流を考察するうえで重要な地域であると考えられながらも、先行調査がほとんどなかったペルー最北部のワンカバンバ川流域での調査である（図 1）。この調査の主たるテーマは、神殿を中心とした流域社会の展開と地域間交流との関係の実態解明であった。そして、ワンカバンバ川流域の遺跡分布調査と、同流域で最大規模の神殿遺跡インガタンボでの発掘調査を通じて、以下の点を明らかにしてきた。

① 神殿で繰り返される諸活動を宗教的・社会的・経済的に支えるために、周辺地域および遠隔地との地域間交流が重要な社会戦略となった。
② 地域間交流の活性化と同時に神殿の大規模化や社会組織の変容などの急激な社会変化が生じた。
③ この変化には、アンデス文明が展開していくなかで、重要な荷駄獣であるラクダ科動物の利用開始とそれに関連した地域間ルートの変化が密接に関与した。

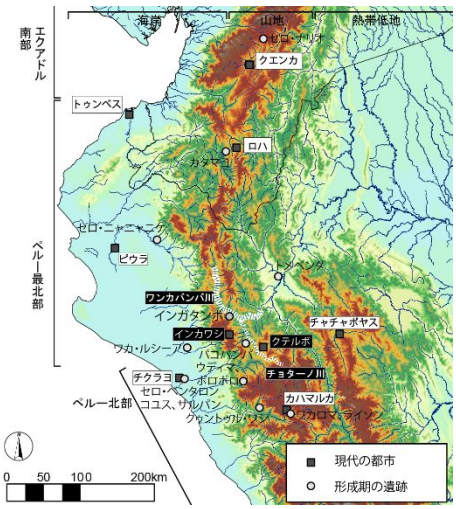

図１　調査地と関連遺跡

この研究は、社会変化において地域間交流がきわめて重要な働きをした社会の存在をうかびあがらせ、その事例をもとに社会成員の活動と戦略から社会動態を捉えた点において、文明形成をめぐる議論に新たな視座をもたらした。

また、筆者らは、インガタンボで継続的な発掘調査を実施するかたわら、ワンカバンバ川流域に存在する他の神殿遺跡の発掘調査や、ワンカバンバ川流域の南方にあるクテルボやインカワシといった地域で踏査を実施してきた。その結果、ワンカバンバ川流域内に時期を同じくて複数存在する神殿の役割が多様であること、地域間交流を契機に流域全体の労働力がインガタンボへ収斂すること、ワンカバンバ川流域とその周辺地域では交流は存在しながらも神殿をめぐる活動と地域間ルート、つまりは地域間交流との関わり方が異なること、が示唆された。

そこで、上記の研究を継承し、発展させるために着想されたのが本研究である。そして、本研究のテーマを考えるうえで最適な対象地域といえるワンカバンバ川流域での調査を実施しつつ、その成果を相対化するためにも、「比較の視座」をふまえてこの問題に取り組むことにした。

２．研究の目的

形成期では、神殿をめぐる様々な活動と地域間交流が、社会変化において重要な役割をはたすとされてきたが、その実証的研究は不十分である。そこで筆者らは、2005 年からワンカバンバ川流域でこの問題に取り組み、神殿を中心とした社会の通時的変化と地域間交流との具体的な関係を徐々に解明してきた。これを継続的に発展させた本研究では、ワンカバンバ川流域の調査を軸に、ペルー南部のナスカ市近郊とエクアドル南部というワンカバンバ川流域とは環境的・文化的に特色の異なる二地域との比較研究を通じて、より多角的な視点から神殿社会の成立・展開と地域間交流との動態的相互関係を実証的に明らかにすることを目的とした。そして、ワンカバンバ川流域の特殊性と他地域との共通性を抽出することで、アンデス文明の形成過程の一端を解きあかし、そのモデル化を試みた。これらをもとに、通時的かつ広域的に、神殿を中心とした社会と地域間交流との相互関係の解明を目指すことが、人類史へ貢献することにつながると考えられたためである。

研究課題は以下の四つである。まず、以下の（１）～（３）の課題へ取り組み、新たなデータ

を獲得したうえで、それらをもとに関連文献を渉猟して理論とデータの双方から（４）の課題を検討した。

（１）ワンカバンバ川流域の社会的状況の解明
　流域内で社会統合の核となるインガタンボに加えて、同流域に存在する他の神殿遺跡を発掘し、その編年や様相（建設活動、儀礼や製作活動、地域間交流）を把握する。各神殿に関わる社会成員の実践を通じて、流域内の社会的状況を解明する。

（２）ラクダ科動物飼養地域との比較
　ラクダ科動物の自然生息域外であるワンカバンバ川流域では、その利用開始が地域間交流や社会変化に多大な影響を与えた。このモデルが自然生息域内でラクダ科動物がより活発に利用された地域でも適用可能かどうか、ラクダ科動物を伴うルートの実態や地域間交流の多様な様態を理解するため、ペルー南部のナスカ市近郊を踏査する。

（３）ラクダ科動物があまり利用されなかった地域との比較
　ワンカバンバ川流域より北方では、同流域以南と比べて、ラクダ科動物の利用が顕著ではない。また、ペルー北部とエクアドル南部では、古くから交流は存在するものの、両者に展開した社会の発展の軌跡は大きく異なり、エクアドルにはペルーでみられる神殿は存在しない。そこで、ペルー北部との交流が常に指摘されるセロ・ナリオ遺跡を発掘し、その編年や様相を把握する。そして、ワンカバンバ川流域との比較を通じ、両者の共通性や多様性を明らかにして、社会変化における神殿の役割および神殿と地域間交流との関係について多角的に考察する。

（４）神殿社会の成立・展開と地域間交流の動態的相互関係の解明
　ワンカバンバ川流域でみられた現象を、これまでにデータを集積してきた周辺地域の社会や、本研究で新たにデータを入手する社会と比較検討する。ワンカバンバ川流域の特殊性と他地域との共通性を抽出して、神殿社会の成立・展開と地域間交流との多様な関係性を明らかにし、そのモデルを構築して、議論の一般化を図る。

３．研究の方法
（１）2017 年度
　ナスカ市近郊で踏査を実施し、山地と海岸部を結ぶ移動ルートを同定した。また、ルート周辺に位置する遺跡や岩絵などのデータを収集し、ラクダ科動物を伴う移動の実態を明らかにした。

（２）2018 年度
　ワンカバンバ川流域にてインガタンボ神殿遺跡と小規模なカニャリアコ神殿遺跡を発掘し、その出土遺物を整理・分析することで、両者の関係性を明らかにした。

（３）2019 年度
　エクアドル南部でセロ・ナリオ遺跡、ロマ・デ・ピンシュル遺跡、エル・ボスケ遺跡を発掘し、その出土遺物を整理・分析した。各遺跡の時間的および空間的関係を把握した。

（４）2020 年度および 2021 年度
　新型コロナウイルス感染症の影響でフィールドへ渡航できなかったため、現地協力者の協力をあおぎながら、発掘資料の整理・分析をすすめた。また、調査成果を総括した。

　全ての年度を通じて、発掘出土資料の整理や分析をすすめた。遺構や遺物のデータはデジタル化もおこないながら、詳細に分析した。建造物や土器に加えて、動植物遺存体の種同定を重点的に実施し、これまでに発掘した全ての資料の分析を完了した。また、遺跡の分布や地域間ルートについては、専門家の協力をあおぎながら、GIS を用いて整理・分析した。さらに、日本においては、常にデータの整理や関連文献の渉猟に努めることで、本研究の理論的背景を強固なものとし、議論の一般化の素地とした。
　調査成果については、研究協力者との討議や国内外の様々な研究者との意見交換をおこないながら精緻化し、国内外の学会や学術雑誌で随時発表した。

４．研究成果
（１）ナスカ市近郊における調査
　ワンカバンバ川流域との比較データの獲得を目指して、ラクダ科動物の自然生息域であり、形成期以前からの利用が考えられるナスカ市近郊において、踏査を実施した。結果として、ペルー文化省に未登録の遺跡や岩絵を複数登録しただけでなく、ラクダ科動物を伴う移動ルートの選定と利用方法、その季節的変化、あるいは現代における徒歩移動ルートとの類似性や差異などについて、比較研究に役立つ詳細なデータを入手した。より具体的には、遺跡の分布状況や山地と海岸部あるいは南北の谷を結ぶルートの存在を明らかにしただけでなく、ラクダ科動物の自然保護区の人々へのインタビューによって、現生のラクダ科動物の実態に関するデータを獲得し

た。また、山地と海岸部を結ぶルート上に、道しるべのような形で複数の岩絵が分布しており、そのなかにはラクダ科動物を描いたと思われる図像があることも確認した。こうした新たな知見は、地域間交流とルート、ラクダ科動物との相関を考察するうえで、基礎となる重要な成果である。また、これらの調査成果は、GIS を用いて整理がすすめられた。

（２）ワンカバンバ川流域における調査

ワンカバンバ川流域においてインガタンボ遺跡とその近隣にあるカニャリアコ遺跡で発掘調査を実施した。その結果、インガタンボでは、地表面から約 5m の深さにある最下層のワンカバンバ期（前 2500-前 1200 年：形成期早期と前期に相当）の建造物を新たに確認した。この建造物は、インガタンボより東に位置する熱帯低地ハエン地方にあるモンテグランデ遺跡の建造物との類似性を示す一方で、建築技法や規模、形態の面で明確な差異がある。また、ポマワカ期（前 1200-前 800 年：形成期中期に相当）とインガタンボ期（前 800-前 500 年：形成期後期に相当）におよぶ神殿の建設過程に関する詳細なデータを獲得することができた。とりわけ重要なのは、神殿建築の中心的部分において、ポマワカ期の半地下式パティオと水路、インガタンボ期の低層基壇をはじめて確認したことである。これらのデータは、インガタンボ神殿でおこなわれた儀礼といった諸活動の実態解明にきわめて有意義な成果であるといえる。また、これらの建造物は、インガタンボの南に位置する形成期の大神殿であるパコパンパとの共通性が高く、両者の交流を強く示唆する。さらに、土器や貝製品などの地域間交流を論じるためのデータを充実させたうえ、年代測定を実施して編年を精緻化した。

カニャリアコ遺跡に関しては、小規模な発掘ながら、その年代的位置づけを明らかにした。その結果、形成期における活動は認められるものの、2005 年に実施した踏査の結果で推測されたように、カニャリアコが小規模な神殿であった可能性は低いことが示唆された。

これらのことから、これまでの調査成果によって示されてきたように、インガタンボが流域内で社会的統合の核となるような神殿であった一方で、流域内に併存した神殿の数は、想定よりも少なかったことが示唆された。また、インガタンボでみられたポマワカ期の建築や配置の変化は、従来の想定よりも早いポマワカ期の後半以降に、インガタンボとワンカバンバ川以南の形成期神殿との交流が活発化し、建設活動の増大にともなってワンカバンバ川流域の労働力がインガタンボに収斂しはじめたことを、推測させるものであった。さらに、発掘で出土した動植物遺存体の分析をすすめることで、インガタンボにおけるラクダ科動物の利用の実態が明らかになってきた。このように、本研究によって、神殿の大規模化・複雑化と地域間交流の活発化が同時に進むことをより明確に示せたことは、神殿社会の成立・展開と地域間交流の相互関係の解明にむけた着実な成果といえよう。

（３）エクアドル南部における調査

エクアドル南部山地に位置するセロ・ナリオ遺跡、ロマ・デ・ピンシュル遺跡、エル・ボスケ遺跡で、発掘調査を実施した。

エクアドル南部山地における形成期の代表的な遺跡であるセロ・ナリオは、先行研究において、常にペルー北部の社会との交流相手と考えられてきた。発掘調査の結果、セロ・ナリオでは 3 時期、ロマ・デ・ピンシュルでは 2 時期、エル・ボスケ遺跡では 1 時期の活動の存在と、各遺跡における建造物の建設過程を明らかにすることができた。また、土器やその他の出土遺物の分析は渡航が制限された影響で不十分ではあるものの、年代測定の結果をふまえて、それぞれの遺跡の編年的位置づけも明確になった。これは、編年が十分に確立されていない当該地域において、きわめて重要な成果であるといえる。また、各遺跡の特性について、現時点で明確に論じることは困難ではあるが、近距離にあり、互いに視認可能なそれぞれの遺跡で並行して活動がみられる時期が存在するという知見がえられた。

さらに、当初予期していなかったが、セロ・ナリオとロマ・デ・ピンシュルの両遺跡では、先行研究で交流が活性化したとされるペルーの形成期中期に相当するコンテクストがみとめられなかった。このことは、ペルー北部の諸社会とエクアドル南部、とくにセロ・ナリオとの交流の存在自体について再検討の必要を促すもので、非常に重要な成果といえる。

こうしたデータは、インガタンボ遺跡との比較の材料となり、これまで編年的位置づけが確かな比較データが不十分なことなどから、詳細な議論をおこなうことができなかったペルー北部とエクアドル南部との交流の実態にせまる可能性を秘めたものである。また、この三遺跡の調査成果をもとに、神殿が存在しない社会の展開と地域間交流との関係をとらえることで、インガタンボの成果を相対化することもできよう。

（４）総括

渡航の制限により、筆者自身による現地での調査・研究は実施できない時期もあったが、ペルーとエクアドルの現地協力者の尽力によって、2017 年以降に獲得したデータの整理・分析作業を一通り遂行することができた。ただし、サンプルの輸出手続きや国外持ち出しができずに、日本で人骨や動物骨の理化学分析を実施することができなかった。また、日本においては、データのデジタル化や GIS による整理作業をすすめつつ、関連文献を渉猟した。想定されていた以上のものをふくむ上述の重要な成果を統合することで明らかになった新たな知見および仮説および

は、以下の通りである。

① インガタンボから出土した動物骨の分析によって、儀礼や荷駄獣として利用された動物の利用状況を、神殿の変化、つまりは社会変化との関連において通時的に把握することが可能となった。また、ラクダ科動物の飼養は専門性に富むものであるため、その導入時や利用時には専門家集団もともにペルー北部に来たことが想定された。さらにその際には、ラクダ科動物の特性にあわせて、地域間ルートも変化したと考えられる。
② インガタンボでは、ワンカバンバ期から祭祀建造物の建設がはじまったが、その建築は他に類例をみない独自性の高いものであった。そのため、周辺地域とは異なる社会展開があったことが想定される。ただし、この問題の解決には、ワンカバンバ期の編年の精緻化が急務である。
③ インガタンボは、パコパンパなど北部山地の大神殿との密接な関係を有したと考えられる。しかし、建築はパコパンパ、土器はクントゥル・ワシというように、物質文化によって類似性を示す神殿が異なることが示唆された。これは、大神殿を有する社会との関係を、インガタンボを支えた人々が、主体的かつ能動的に選択したことを推測させるものである。
④ ペルー北部とエクアドル南部との交流については、形成期中期より以前に存在した交流の結果として、後者から前者に土器様式がもたらされたことが想起される。そのため、形成期中期のペルー北部の社会発展は、エクアドルの社会との関係ではなく、ペルー北部の神殿社会間の相互作用の結果であった可能性がある。

これまでの調査と本調査によって、ワンカバンバ川流域では、社会的統合の中心であったとされる神殿の大規模化・複雑化と地域間交流の活発化および質的変化との間に、密接な関係があったことがより明白となった。また、ペルー南部とエクアドル南部という環境的・文化的に特色の異なる二地域のデータとの比較検討によって、ワンカバンバ川流域の成果を相対化し、多角的な視点から神殿を中心とした社会の成立・展開と地域間交流との動態的相互関係を実証的に明らかにする、という本研究の目的は概ね達成できたと考えられる。今後は、これまでの研究成果とのさらなる総合をすすめ、既述の動態的相互関係を一般化しながら、本研究成果を精緻化していくことが肝要である。また、本研究成果をより深化させていくためには、交流の結節点であるインガタンボだけでなく、ペルー最北部やエクアドル南部の調査の充実が不可欠であると考えられる。

本研究でえられた成果については、とくに研究機関の後半においてはオンライン形式が主となったものの、国内外の学会やシンポジウムで発表したほか、様々な出版物においても随時発表をおこなってきた。そのインパクトは大きく、十分な評価をうけており、さらなる調査の継続と成果の出版が期待されている。とくに、こうした研究成果の一部は、2017 年にペルーで現地研究者とともに企画・実施した国際シンポジウムでの発表やその成果出版物という形で実を結んでいる。また、2022 年 3 月には、調査成果をふまえて、初学者向けの導入書および大学学部生用の教科書を編纂した。さらに、これまでの研究成果は、ペルーの調査地における教育機関へのリーフレットの配布や、エクアドルの調査地での講演会やメディアへの情報提供という形で、少しずつではあるが現地社会と共有することができており、本調査の社会的意義は大きいといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Atsushi Yamamoto	４．巻 129(2)
２．論文標題 Complexities of regional and interregional interactions during the Formative Period in northern Peru: New perspectives from Ingatambo, Huancabamba Valley	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Anthropological Science	６．最初と最後の頁 133-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1537/ase.210409	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本睦 2020 （山本睦，フアン・パブロ・バルガス，オスカル・アリアス，門叶冬樹	４．巻 23
２．論文標題 エクアドル南部山地の発掘調査―セロ・ナリオ遺跡、ロマ・デ・ピンシュル遺跡、エル・ボスケ遺跡―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古代アメリカ	６．最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 山本睦，マリーナ・ラミーレス	４．巻 22
２．論文標題 ペルー北部インガタンボ遺跡（第五次）とカニャリアコ遺跡の発掘調査	５．発行年 2019年
３．雑誌名 古代アメリカ	６．最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Atsushi Yamamoto y Marina Ramirez Santillana	４．巻 -
２．論文標題 Excavaciones en los sitios arqueologicos Ingatambo y Yerma, Cajamarca	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Actas de III Congreso nacional de arqueologia	６．最初と最後の頁 283-290
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 山本睦
2．発表標題 ペルー北部の形成期社会にラクダがもたらしたもの―形成期中期から後期の社会変化とラクダの社会的位置づけ―
3．学会等名 出ユーラシアの統合的人類史学-文明創出メカニズムの解明-」第6回全体会議
4．発表年 2022年

1．発表者名 Luisa Diaz, Oscar Arias, Atsushi Yamamoto
2．発表標題 Presentacion de publicacion. Paisaje y territorio en los Andes Centrales: Practicas sociales y dinamicas regionales
3．学会等名 VIII Congreso Nacional de Arqueologia, Peru（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Yamamoto Atsushi, Juan Pablo Vargas and Oscar Arias Espinoza
2．発表標題 Investigations in the Valley of Canar, Ecuador: Preliminary Results at Cerro Narrio and Loma de Pinshul
3．学会等名 86th Annual Meeting, Society for American Archaeology.（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 山本睦、鶴見英成
2．発表標題 ペルー北部におけるリャマの重要性とその社会的位置づけ
3．学会等名 第26回古代アメリカ学会研究大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 鶴見英成、大谷博則、松本剛、渡部森哉、山本睦
２．発表標題 航空古写真による地形と遺構の復元：ペルー北部ヘケテペケ川流域を中心に
３．学会等名 26回古代アメリカ学会研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本睦、フアン・パブロ・バルガス、オスカル・アリアス
２．発表標題 ペルー北部とエクアドル南部における形成期の編年と地域間交流
３．学会等名 第25回古代アメリカ学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山本睦、フアン・パブロ・バルガス、オスカル・アリアス
２．発表標題 エクアドル、セロ・ナリオ遺跡とロマ・デ・ピンシュル遺跡の発掘
３．学会等名 第24回古代アメリカ学会研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Proyecto arqueologico Ingatambo: Trayectoria y relacion con las comunidades
３．学会等名 Simposio conmemorativo por los 120 anos de la inmigracion japonesa / Ano de la amistad Peruano Japonesa y los 40 anos de investigacion de la Mision Arqueologica Japonesa en Cajamarca
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Ingatambo: Frontera norte del Periodo Formativo y su potencial para el desarrollo social
３．学会等名 Simposio por el ano de Amistad entre Japon y Peru; “Proteccion del patrimonio cultural peruano en le nuevo milenio: Perspectivas y experiencias de investigadores de Peru y Japon
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuichi Matsumoto y Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Las fronteras del fenomeno Chavin
３．学会等名 国際シンポジウム「Nuevas Perspectivas a la Formacion de Civilizacion Temprana en Los Andes: Cronologia, Interaccion, y Organizacion Social」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Estudios de la dinamica cultural para el Desarrollo en las fronteras en la epoca prehispanica
３．学会等名 I Congreso Mundial y II Jornada Nacional e Internacional de Investigacion Cientifica（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Emergencia de la complejidad sociopolitica en el norte de Peru: Una perspectiva diacronica del valle de Huancabamba, vertiente oriental de los Andes
３．学会等名 XXVI Congreso Nacional de Estudiantes de Arquologia（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Investigaciones en el sitio arqueologico Ingatambo y el valle de Huancabamba, Jaen
３．学会等名 1ra Jornada de Investigaciones Arqueologicas en la region Cajamarca（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Atsushi Yamamoto
２．発表標題 Emergence of sociopolitical complexity in Northern Peru: A diachronic perspective from the Huancabamba Valley
３．学会等名 83rd Annual Meeting, Society for American Archaeology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 ATSUSHI YAMAMOTO
２．発表標題 Interaccion y complejidad sociopolitica en la frontera norte del Peru
３．学会等名 国際シンポジウム「Rutas e interacciones humanas en los Andes」
４．発表年 2018年

１．発表者名 ATSUSHI YAMAMOTO
２．発表標題 La transicion de paisaje politico en el valle de Huancabamba, el extremo norte y la vertiente oriental de los Andes
３．学会等名 Simposio Internacional: Paisaje y Territorio. Practicas Sociales e Interacciones Regionales en los Andes Centrales
４．発表年 2017年

〔図書〕　計10件

1．著者名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 390
3．書名 アンデス文明ハンドブック	

1．著者名 山本睦，松本雄一	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 22-31
3．書名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）『アンデス文明ハンドブック』担当「序　形成期という時代、神殿更新論という視座」	

1．著者名 山本睦，松本雄一	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 308-311
3．書名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）『アンデス文明ハンドブック』担当「序　考古学は過去だけを対象とするのではない」	

1．著者名 松本雄一，山本睦	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 7-20
3．書名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）『アンデス文明ハンドブック』担当「序章―アンデス文明研究とその背景」	

1．著者名 松本雄一，山本睦	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 151-168
3．書名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）『アンデス文明ハンドブック』担当「周囲の神殿ではなにがおきていたか―文明の形成を端から眺める」	

1．著者名 松本雄一，山本睦	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 174-179
3．書名 関雄二（監修），山本睦，松本雄一（編）『アンデス文明ハンドブック』担当「序―国家、帝国、狭間の社会」	

1．著者名 Luisa Diaz, Oscar Arias y Atsushi Yamamoto (eds.)	4．発行年 2021年
2．出版社 Fondo Editorial de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima	5．総ページ数 277
3．書名 Paisaje y Territorio en los Andes Centrales: Practicas sociales y dinamicas regionals	

1．著者名 Atsushi Yamamoto	4．発行年 2021年
2．出版社 Fondo Editorial de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima	5．総ページ数 71-91
3．書名 Luisa Diaz, Oscar Arias y Atsushi Yamamoto (eds.). Paisaje y Territorio en los Andes Centrales: Practicas sociales y dinamicas regionals. 担当"La transicion del paisaje en el valle de Huancabamba durante el Periodo Formativo (3000-1 a.C.)"	

１．著者名 Atsushi Yamamoto	４．発行年 2021年
２．出版社 University Press of Florida	５．総ページ数 83-105
３．書名 Ryan Clasby and Jason Nesbitt (eds.). The Archaeology of the Upper Amazon: Complexity and Interaction in the Andean Tropical Forest. 担当"The Emergence of Social Complexity in Northern Peru: A Diachronic Perspective from the Huancabamba Valley"	

１．著者名 Atsushi Yamamoto	４．発行年 2018年
２．出版社 Yanapay Andina Consultores	５．総ページ数 135-143
３．書名 Quirino Olivera (ed.). Arqueologia y Turismo. 担当"Ingatambo, un Centro Ceremonial en el Valle de Huancabamba, Pomahuaca, Jaen"	

〔産業財産権〕

〔その他〕

調査に関しては、ペルーおよびエクアドルで現地メディアにとりあげられた。また、日本でも、調査に関する記事を新聞社に寄稿した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Simposio Internacional: Paisaje y Territorio. Practicas Sociales e Interacciones Regionales en los Andes Centrales	2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ペルー	サンマルコス大学			
エクアドル	クエンカ市考古局			